

追憶断片

稲賀繁美

昭和五〇年代といえ、梅原猛は遠隔受像器の画面でも、「歴史探訪」であったか、歴史もの番組にしきりに出演していた。その年に大学に入学して最初に生協で買ったのが、梅原猛の最初の対談集『考える愉しさ 梅原猛対談集』（新潮社、一九七五年）だった。だが当時はむろん、そんな有名な人と、将来まがりなりにも直接やりとりをするような機会が訪れようなどとは、夢想だにできなかった。それから干支も一巡した頃だったろうか、一九八〇年代にパリに留学していた筆者は夜、リュクサンブール公園から少し南に下がったあたりの街路の隅に置き去りにされた、日本語書籍を偶然に発見した。おそらくは商社の滞在員の方あたりが、帰国にともなって、捨てるに忍びず、置いてゆかれたものだったのだろう。数冊の文庫だったが、小雨が降っており、放置すればまもなく紙面は崩れ、不定形のパルプへと還元されるのは、明らかだった。こんな異国の空の下では、日本語を読める御仁に遭遇する機会も、もはやあるまい。綴じ紐を解いてみると、そのなかに梅原猛の

『隠された十字架』があって、思わずこれを救出した。異国への留学中には、母語に飢えるもの。下宿にもってかえったまま、その文庫本の魔力に釣り込まれ、夜を徹して読み終えた記憶が、今も鮮明である。広島之父に大胆な仮説展開の魅力のようなことを綴ったのでもあっただろうか、返答の書簡に「だいぶ梅原さんに当てられたな」といった感想が書いてあったのを記憶する。

筆者が国際日本文化研究センターに奉職することとなったのは、一九九七年の四月であった。その年の創立記念日であったか、雨のため室内での実施だったと記憶するが、梅原先生（と、以下適宜お呼びする）は、初対面の当方に眼をとめるや、「君が稲賀君か。ヤーよく来た」と破顔一笑、そのまま腕をつかんで、当方をもよりの座席にひっぱりこまれた。七〇過ぎの老人とは思えない「熱烈」なる腕力であった。その二年後であったか、これも偶然から姫路市の和辻哲郎文化賞なるものを頂戴したが、その選考委員の三名のなかには梅原先生の名前もあった。選評を見ると、「まずは順当」としながらも、筆者個人の意見が抑えられている論述に、遠慮しすぎだ、と不満が漏らされている。その後別の機会に直接お会いした折にも、「自分はこう思う、こう考えると、積極的に述べねばならぬ」という信条を漏らされた。歴史史料の解釈から、自ずと著者の見解が現れる、という程度では不十分なのだ、と。

この折の選考は、実際には「順当」なものにすんなりと落ちついたわけではさらさらなく、選考委員の間で見解が激しく対立し、そのあげくダークホースよろしく拙著が選ばれた、という経緯だったらしい。それでも自分ひとりが積極的に推した作品が選から漏れた中野孝次は、公開講演・

授賞式の選評報告のおりに、美術史学の作品など自分は評価しないと、とあからさまに酷評され、記者会見のおり、新聞記者が当方へその応答を求めた。これは選考委員会あるいは賞の主催者が対応なさるべきことであつて、筆者としても申すべき立場にはない、とお答えした。梅原氏は、当日はご欠席で、当時、姫路文学館の館長をしておられた上田正昭先生が、実に見事に対応されたことと記憶する。

あとで宴席の隣席となつた中野さんに問はず語りで尋ねると、その昔ご著書『プリューゲルへの旅』にたいして、美術史の専門家から酷評を食らつた。そのことが根にあつて、それきり美術史家は敵とみなしている、というのが、『ハラスのいた日々』の著者からのご返答だつた。プリューゲルの《冬の狩人》（今日では《雪中の旅人》とも）を表紙とした著作は、当方にとっては、大学に入学してすぐの愛読書の一冊だつた。中野さんは、この絵が戦時下の暗い記憶に通じるという。ほぼ同世代のモーリス・パンゲさんからも酷似した話を聴いたことがあつた。スターリンググラードの攻防戦の報道を聞きながら、教科書に掲載された《冬の狩人》（ヴィーン美術史美術館蔵）の白黒複製版に見入つたのだという。奇縁だが、そうした幼少体験の思ひぬ重奏を、中野さんと語り合う機会が、こうして得られたことになる。ちなみに和辻賞の最終選考では、著名な三人の評者の意見が真つ向から対立して激論となる場面も珍しくないそうで、司馬遼太郎や陳舜臣も含むその歴代の録音記録はさぞかし興味津々だろうが、もちろん公開はされていない。

——二——

年代はもはや正確には記憶していないが、四〇過ぎても独身暮らしの当方の様子を見かねたものか、日文研の創立者とその周辺、三代目所長の山折哲雄先生まで巻き込んで、こいつを結婚させようという企てが持ち上がった。冷房もない公務員宿舍の一人暮らしである。そのせいか、はて、あやつはちゃんと風呂に入つとるのだろうか——という疑義が、大先生たちのあいだで、ひとしきり話題になつていたのでそうな。事情も弁えぬまま、京都の老舗の某料亭に一夕招かれて、ご馳走を肴に品定めに供されたようだが、本人はそんなことはまったく気づかぬトウヘンボク。旧師の芳賀徹夫妻も、別の手打ち式だつたかで同席されたが、幸にも、と申すべきか、生憎と申すべきか、話はそれだけで立ち消えとなつた。当方など田舎者もよいところで、京都の花街へのお招きとなる、と、育ちも境遇も生活環境も異なる別世界のお話だつた。後になつてそういう設定だつたと遅まきながら聞き知るに及び、怖じ気づいた当方が慌てふためき、平身低頭にて、仲介役の山折先生にご遠慮申し上げた格好である。

古都にはいまでもこうした美風が息づいていたのか。それとも時代にまだそうした名残があつたのか。いずれにせよ、二度とない貴重なお勉強の機会を梅原夫妻から頂戴していたことだけは、違いない。ただし、如何せん、当方など逆立ちしても、九鬼周造男爵の器量ではない。尻尾を巻いて逃亡を図つたに等しい失態だが、心許す内外の悪友にこの経緯をそれとなく語ると、おまえ馬鹿だなあ、せつかくの玉の輿をみすみす——といった反応がかえつてきた。まあしかし、もとよりつと

まらぬ任務は、務めぬほうが賢明だろう。逆にいえば、当時、日文研の研究者には、京都市内でそれだけの下馬評があり、初代所長の梅原氏をはじめとした歴代の所長たちは、所員の世評を輝かせる存在たり得ていた訳だ。それかあらぬか、その後、中国と韓国の旧師・旧友を核として「稲賀を結婚させる会」なるものが密かに作られ、外堀を徐々に、しかし着実に埋められ、挙句には「事なき」(?)を得て、現在に至っている。

三

それと前後する時期となるはずだが、梅原先生は、当方の父、稲賀敬二の業績に、京都新聞の日曜連載で、特段の評をお書きになった。『落窪物語』の登場人物には「頭髮の不自由」な老典葉助が登場する。これがどうも清原元輔によく似ている。とすればこの物語の創作には、元輔の娘だった清少納言が関与していたのではあるまいか。この、国文学の世界ではいささかならず突飛の仮説を、梅原先生は、大いにおもしろがり、愉しまれたものと思しい。『京都新聞』連載の「京都遊行」三八回、三九回の記事(二〇〇二年二月三日、一〇日掲載)。この段階で、当該の国文学者はすでに没していたはずだが、そのあたりの前後関係が、当方には、いまにして腑に落ちない。またこの国文学者がたまたま当方の父であるとは、この段階での梅原先生は、まだご存知ではなかったはずだ。あるいは『創造の世界』誌の連載で『堤中納言物語』について父と対談の機会をもっていた河合隼雄先生から(『物語をものがたる——河合隼雄対談集』小学館、一九九四年)、あれは親子だといった情報が、

梅原顧問の耳に届いていたのかも知れない。その後、『稲賀敬二コレクション』全六巻の著作集を笠間書院が出版してくださる段取りとなった。その折、梅原先生より、この逸話をもとに、第一巻『物語流通機構論の構想』(二〇〇七年)に帯まで頂戴した。岩水久美さんに取り次いでいただいたが、これも当方から「お願いした」というより、何かの折にお会いしたら、梅原氏自ら「これは是非とも、自分が書く」と言い出された案件である。見出しには「私はそこに真の国文学研究者をみた思いである」とある。身内から見れば、いささかならず買ひ被りではあるまいかと憚られ、恥じ入るが、梅原氏の学問に対する姿勢が素直に表現された文章なので、ここに再録させていただく。

日本文学研究は契沖・真淵・宣長・篤胤などによる国学の路線を無批判に歩むものであるという偏見を私は強く抱いていた。たとえば「柿本人麻呂Ⅱ流罪刑死説」はすでに国学以前の古代中世の文献の多くに暗示されている。そのような暗示を敏感に受け止めず、契沖・真淵によって確定された人麻呂像に現在もなおしがみついている日本文学研究者に私は大いに不満を覚えている。

このような日本文学研究者への偏見をもっていた私は稲賀敬二氏の著書に触れて、その偏見を捨てるべきであると感じたのである。『落窪物語』についての見解など、まことに大胆でしかも卓抜。そして作者がいささか滑稽人物である清原元輔の娘であるという視点で清少納言の『枕草子』を読み直すと大変おもしろいのではないかと思った。稲賀氏の文章もいささかの

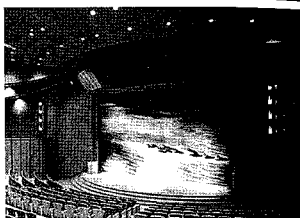
らいもなく簡潔で明解。私はそこに真の日本文学研究者をみた思いである。

四

「君のお父さんの文章はいいが、あんたのは悪文やなあ。フランス語の翻訳調や」。何度となく梅原氏からは、そう揶揄された。美術史家のはしくれでもあった（もはや過去形である）筆者は、日文研に着任して教授昇進後、初めての共同研究の企画運営で「京都を中心とした伝統工芸再考」の話題を頂戴した。「頂戴」した背後には、世田谷美術館初代館長の大島清次先生や、西陣で錦織の伝統を継ぐ龍村光峯さんのありがたいお力添えがあった。京都の右も左も弁えない当方などにはこのような依頼が来たについては、この方面の第一人者であった吉田光邦先生がお亡くなりになって後、京都盆地在住の学者では、誰も手が出せないに等しい状況となっていたこともある（ジャンヌ・コッピさんに招かれたパリで佐渡金山の採掘と精錬方法について講演された和服姿の吉田先生に、筆者は一度会って、親しく会話を交わした経験がある。フランスの化学者が佐渡Sadoの精錬はsadiqueだと冗談を言ったのを、ふたりして話題にした事を覚えている）。京都の「工芸」研究会の主催など、弁えもない余所者の門外漢だからこそその異例の抜擢であり、その後京都内外のこの分野の複雑な状況を知るにつけ、これは未熟者がたいへんな所に手を出したものと、自分の自覚なき蛮勇に、冷や汗をかくことしきりだった。その記録は『伝統工芸再考——京のうちそと』（思文閣出版、二〇〇七年）にある。その関係で、八木一夫について、フランス語も含めて思わぬ論者が副産物よろしく誕生した。日



秋野不矩画〈渡河〉（浜松市秋野不矩美術館）



日文研講堂内（日文研HPより）

文研での公開討論会の記録は樋田豊次郎氏と共編の『終わりきれない「近代」——八木一夫とオブジェ焼』（美学出版、二〇〇八年）。その報告書を謹呈すると、さっそく梅原先生から、八木が生きていてこれを読んだら、さぞや驚いたことだろう、という感想を記した手書きの葉書が戻ってきた。いうまでもなく、梅原猛は、京都

市立芸大学長のおり、陶藝家の八木一夫や、彫刻家の辻晉堂とはきわめて親しくしていた。市立芸大の絡みでいえば、ダヤ川を水牛の群れが渡る壮大な画面が、日文研講堂の緞帳に取られている。秋野不矩さんの原画を梅原氏が鳴り物入りで特注した設えだが、なんでも市立芸大の教授会は席順が五〇音順、「あ」と「う」のおふたりは、隣席同士の縁もあって意気投合された、とも伺った。そうした心温まる秘話は、講演会のあとなどに、日文研の応接間でも耳にする機会もあったが、コト八木一夫や辻晉堂となると、とてもここには活字にできない類の裏話、大学移転の大騒動の顛末やら、飲み屋での大失態やら珍事珍談、家族関係に関するオフレ

ゴ情報に至るまでを、こともなげに、なにげなく漏らされた折節も多い。それら、余人は知らず、また後世にも残せない秘話・奇譚の類は、梅原氏の胸底に湛えられたまま、あの世へと持ち去られた。「オブジェ焼」の八木一夫から連想を逞しくするならば、造形美術関係では、梅原猛には『歓喜する円空』（新潮社、二〇〇六年）という著作もある。北海道も含む日本全国に円空の足跡を訪ねた実地検証と現場踏破の賜物である。これも筆者の滞米中にご恵投を得て、熱暑のワシントンDC、動物園ほど近くの寓居で、汗を掻きかき夢中で繙いたのも懐かしい。

どうやら梅原著作は、異境の空の下でも、というか異国にあればこそ一層、読者を引き込む、不思議な磁力を秘めている。造形にも絵画にも、演劇にも詩にも眼力が効き、そこに哲学的な奥行きある観察を自在に展開する——。平易で読ませる文体を駆使しつつ、行くところ不可ならぬ広大な視野と、幅広く深い洞察は、やはり希有であり、およそ誰にでも期待できるものではない。「梅原さんは天才やから——」。その道では自分が「一番」だと豪語しては憚らなかつた二代目所長、河合隼雄さんが、折に触れて、ボンリと口にする文句だった。

五

梅原猛は晩年に「人類哲学」を構想し、『人類哲学序説』（岩波新書、二〇一三年）を残した。それをそのまま継ぐことは不可能であるにせよ、その志を別の形で具現してゆく努力は継承されねばなるまい。筆者はそれに前後する時期から、日文研の共同研究会で『東洋意識——夢想と現実のあ

いだ一八八七—一九五三』（ミネルヴァ書房、二〇一二年）、『海賊史観からみた世界史の再構築——交易と情報流通の現在を問い直す』（思文閣出版、二〇一七年）といった企画を進め、この秋には『映しと移ろい——文化伝播の器と蝕変の実相』（花鳥社、二〇一九年）を上梓している。それらと平行して単著としては『絵画の臨界——近代東アジア美術史の桎梏と命運』（名古屋大学出版会、二〇一四年）、『接触造形論——触れあう魂、紡がれる形』（同、二〇一六年）を公刊した。ここはその意図を詳述する場ではない。だがそこに、西欧起源の哲学に内属するだけでなく、かといって徒に東洋の自己主張を声高に述べるのでもなく、その両者の相互浸透の実相から新たな可能性を開発したいという姿勢だけは、一貫して堅持してきた所存である。東西の、あるいは南北の出会い、その三角測量から生まれる「触変」さらには「蝕変」にこそ、狭隘な自己同一性から脱皮する変身の契機を捉え、文化交流の現場を見定めたいという志向である。そこには異文化との接点に芽生える哲学的な思索があり、それは、生者と死者との閼を跨ぐ「顕幽一如」の倫理観の模索とも連携する。もとより、そうした志向がどこまで梅原猛の意図を汲んだものかは、即断を許すまい。また、初代所長が及ぼした巨大なまでの社会的影響力を考えるならば、もとより器の違いは、云々すべくもない。本来期待されるだけの役割を演じるにはほど遠いままで、この職場を後にする期日が近づくことを自覚するにつけ、いままさら自らの卑小さを嘆じても、始まるまい。

とはいえ、直接にはあれこれ注文を付けたりもせず、干渉らしきことは一切なさらなかつた「顧問」の精神的な影響が、日文研の専任研究員たちのあちこちに、ふと看取される。怨霊史観が妖怪

研究に、笑いの研究が大衆文化研究に変貌を遂げつつ発展し、沖縄・アイヌの文化誌が、東アジア文化誌の構想へと拡張されつつ、相互の信頼関係に根ざした国際的な共働作業の充実を聞してきた。三〇年に及ぶその成長の様には、一種、不思議の感慨を催している。発足当初の「国策機関」という中傷は払拭され、梅原猛は怨霊として再帰こそせぬにせよ、肉体の軛を脱した精霊として、桂の杜の奥底に溶け込んでいったようにも思われる。

六

梅原猛の晩年の著作の一冊に、『水木しげる——鬼太郎、戦争、そして人生』（新潮社・とんぼの本、二〇一五年）という、月刊誌の対談を基にした著作が知られる。これも偶然だが、筆者の父の一家は、「水木しげる」こと武良茂さんの一族と同郷。両家は境港の漁港町の船着き場の突端ちかく、「水木しげるロード」と改称された中央通りを隔てて、近所付き合いがあった。しげるさんのご両親は、NHK朝のドラマの『ゲゲゲの女房』でも著名となったが、このおふたりは、当方の祖母・きくのは幼馴染み、境小学校以来の同窓だった。筆者も幼少の夏休みの帰郷の折（一九六五年）に、亮一と琴枝のこの老夫婦の風貌に親しく接した経験がある。「家の次男坊もようやく最近人氣がでて」とのことです。漫画数冊を頂戴した。河童の三平や宮本武蔵があったのを今に覚えている。我が家を訪れたおふたりだが、勝気な御母上の背後に、おつとりとした長身の御父上が連れ添っておられた。その仲睦まじいご様子が、テレビ放映に現れた両親の様子にあまりにそっくり

だったのには驚愕した。とりわけ竹下景子は、体格こそ異なるものの、しぐさふるまいが本物の母堂そっくりだった。半世紀以上昔の、境港の自宅台所での光景がまざまざと眼前に蘇り、おもわず鳥肌が立ったのを覚えている。

そうしたなか、筆者の曾祖父は、どうやら水木しげるの祖父と、同じ山陰の小さな港町で、親しく漢詩の遣り取りをする仲にあった。その交流の跡を忍ばせる一篇が、恵四郎／南畝の遺した漢詩雑稿にも残る。この粗末な手稿を、日文研に客員研究員として滞在されていた、日本漢詩研究家のJudith Rabinovich & Timothy Bradstock夫妻に、「つまらぬ遺品ですが、とお見せした。すると帰国されたそのおふたりが、翌年には“Paulownia Leaves Falling”と題して、曾祖父の詳細なる略伝とともに、残されたすべての漢詩の活字起こしに卓抜なる英訳まで施して、日文研の欧文研究誌Japan Review No.21 (2009, pp.33-122)に掲載してくださいました。文学的な価値はとにかく、同時代の地方詩人の実態を証拠たてる漢詩遺稿は、めったに出現せず、学術上、珍品なのだという。いささか私事に涉るが、こうした思わぬ追憶を込めた先祖孝行も、日文研に奉職させて頂くご縁なければ、決して実現することはなかっただろう。

人生の機微は、因果を離れた偶然から連鎖する。この一事をここに記録に残すことで、あらためて梅原顧問の、手抜きない目くばりと、巧まざる仁徳とに、深い感謝の意を捧げたい。